「いわての復興教育推進事業（交流学習スクール）」成果報告書

学校名：普代村立普代小学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

普代村は、東日本大震災により、主産業である漁業をはじめとし甚大な被害を受けた。一方で、過去の津波被害の経験から30年以上前に設置した高さ15.5メートルの水門により、人的な被害はほとんど見られなかった地域でもある。

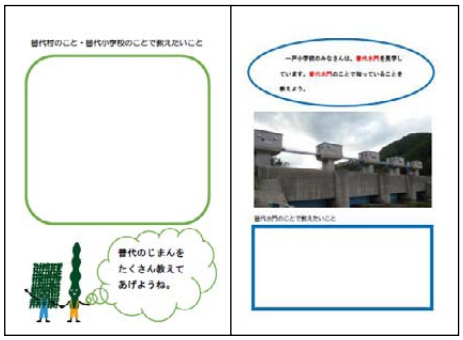
普代小学校は全校児童103名の学校である。隣接する普代中学校と小中一貫教育に取り組んでいる。小学校６年間を通して、地域の自然や産業、伝統等を地域の人々と関わりながら学ぶことで、地域に対する親しみや誇りをもち、復興に向けて努力する地域の人々に対する思いを深める子どもの育成を目指している。

交流学習を実施した５年生は、前学年で普代水門や防潮堤の学習を行い、震災から地域を守った施設や当時の人々の働きについて理解を深めている。今年度は、地域の主産業である漁業や地域の人々が大切にしている伝統芸能「鵜鳥神楽」について学んでいる。一戸小学校との交流では、さまざまな視点から地域を見つめ、地域の自然・文化についての理解や誇りを深めるために、地域の人々の復興への取組や地域の自然や伝統について紹介する活動、震災について学ぶ活動に取り組んだ。

Ⅱ　取組の概要

１　事前学習

一戸町の産業や観光等について事前に学習し、さらに一戸町について知りたいことや聞いてみたいことを考えた。また、４年生時に総合的な学習の時間に学んだ普代水門のことや普代村の教えたいことについてもまとめ、初めて会う内陸の児童と話が盛り上がるような交流タイムにするための工夫を話し合った。



【事前学習資料】

２　交流会

（１）　各校の紹介（伝統芸能などの紹介）

一戸小学校は、御所野遺跡の紹介や学校紹介の後、「よさこいソーラン」を発表した。また、普代小学校は、これまでの復興教育の取組を紹介し、伝統芸能として引き継がれている「鵜鳥神楽」を発表し、お互いの学校で学習していることを紹介し合った。

【普代小学校　学校紹介】

（２）　交流タイム

児童同士の交流を深めるために、ゲームを取り入れた。昨年度は普代村を紹介することをねらいとしてカルタ大会を行ったが、今年度はさらに交流を深いものにしたいという願いから、好きな食べ物や今流行っている遊びなどのお題を出し、自己紹介をしながらゲームをして交流を図った。初対面で緊張気味だった児童も、ゲームをとおしてお互いを知ることで会話が弾み、笑顔で交流する姿が見られた。

【自己紹介ゲーム】

（3）　交流給食

グループごとに普代の特産物である鮭やすき昆布を使った給食を食べながら交流をした。事前学習で準備していた一戸町についての質問をしたり、普代村の紹介をしたりして、会食していた。一戸小学校の児童からは、「鮭がおいしかった」、普代小学校の児童からは「普代のことを話しながら楽しく給食を食べることができた」という感想があった。

（4）　震災学習列車乗車

三陸鉄道震災学習列車に乗車し、震災時の様子について説明を受けたり、復興の様子を車窓から見学したりした。本校の児童も震災当時の記憶はほとんどなく、震災当時の避難の様子や津波被害の状況を学び、震災の被害の大きさを実感していた。

【震災学習列車での学習】

3　事後学習

交流をとおして学んだことを振り返る学習を行った。一戸小学校の児童に、自分たちの村や学校を紹介することで、普代の魅力を児童は再認識していた。また、震災について学び直すことで、震災の恐ろしさや備えることの大切さを改めて感じていた。

> 普代小と一戸小の交流会で、ぼくたちは、普代のおいしいわかめやこんぶなど、いろいろな名産があることを伝えることができました。

> 震災の話を聞いて、自分の命も、友達の命も、家族の命もみんな大事だということを感じました。震災で多くの命がなくなったことを忘れず、時間がたっても、震災のことを伝えていきたいと思います。

【児童の感想】

4　復興教育児童生徒発表会

２年間の交流学習スクールの取組を「いわての復興教育児童生徒発表会」で発表した。震災後８年間の復興教育の取組を「いきる・かかわる・そなえる」の視点で整理してまとめ、地域と児童をつないでいる鵜鳥神楽の発表を行った。

Ⅲ　取組の成果と課題

1　成果

（1）　一戸小学校に地域について紹介する活動を行うことにより、自分たちの地域を見つめ直し、理解を深めることができた。

（2）　内陸部の小学生と沿岸部の震災の様子を学習する活動を取り入れた。そのことにより、震災の被害や地域を守った施設への理解を深め、改めて防災について見つめ直すことができた。

（3）　一戸小学校の児童が、地域にある「御所野遺跡」の世界遺産登録に向け、主体的に広報活動に取り組んでいる様子を知ることにより、地域のよさを発信する視点を得ることができた。

（4）　「いわての復興教育児童生徒発表会」で発表の機会をいただいたことにより、地域と関わり続けることが、「いきる・かかわる・そなえる」のすべてにつながることを再認識することができた。

2　課題

（1）　交流を行うことができたのは１日限りで、その後はお互いの感想を交換するのみとなった。事前学習の段階から交流校の地域や学校の知りたいことを児童同士で連絡し合う等の互いを知る場を設定し、より深く交流できるような取組を計画し、活動の充実を図りたい。